

フェリーさんふらわあ、「昼の瀬戸内航路」乗船ルポ

船旅の原点・魅力を発見

フェリーさんふらわあ(興村明仁社長)は、来年5月28日に迎える阪神／別府航路の開設100周年を記念して、10月8日および11月5日の別府発の便において「よみがえる昼の瀬戸内航路」を実施した。これは通常夜の出港時間を朝に変更して昼の風光明媚な瀬戸内海の島々を堪能するクルーズで、同航路における昼の運航は37年ぶりのこと。また、同社は乗客に対して実施したアンケートで同航路が好評であったことを受け、来年4月の実施も決定している。今回は11月5日出港便に乗船し、その魅力を探った。

〔「テープ投げ」で別府に別れ〕

「よみがえる昼の瀬戸内航路」(以下、昼の瀬戸内航路)の出発地となる別府観光港に到着したのは、出港時刻の1時間前となる午前9時。空はあいにくの曇天模様。ターミナルのなかに入ると、待合室はすでに乗客で溢れかえっている。乗船開始時間となり、船内の案内所で受付を済ませると、乗客は外部デッキに集まる。フェリーさんふらわあの名物となっている「テープ投げ」をするためだ。出港時刻が近づくと、乗客は次々と岸壁に向かって色とりどりの紙テープを投げ、それを岸壁で同社の従業員らが受け取ってくれる。自分の手にあるテープが陸と結ばれているのを見ると、海と陸とが一体にな

った感じがする。やがて船内に銅鑼の音が響き、汽笛を鳴らして本船は出港。陸とつながるテープが次々と千切れ、遠ざかっていく温泉郷・別府の街並み。多くの乗客は別れを惜しみ、いつまでも手を振っていた。

〔大迫力の瀬戸内三大橋通過、船内では伝統工芸を体験〕

昼の瀬戸内航路の魅力は、まだ日のある時間帯に風光明媚な瀬戸内海の景色を堪能できること。島々を通過する際に船内アナウンスで説明してくれるのもうれしい。そのなかでも特に見所なのは、来島海峡大橋、瀬戸大橋、明石海峡大橋という瀬戸内三大橋をくぐり抜ける瞬間と



テープ投げのようす



来島海峡大橋をくぐり抜ける



ジャズライブは大盛況

いえよう。釣島水道を抜けると、日本有数の船舶の輻輳海域である来島海峡に入る。多数の船舶が行き交うなか、本船は注意深く進む。遠くに来島海峡大橋が姿を現し、間もなく外部デッキは人でいっぱいになった。普段、下から眺めることのない巨大な構造物が徐々に近づき、その真下をくぐり抜ける瞬間は大迫力。デッキではいたるところで驚きの喚声が高かった。

一方、船内では工夫を凝らした、さまざまなイベントが開催されていた。今や船内イベントの定番ともなっている「さんふらわあジャズライブ」では、3人の熟練ミュージシャンが生演奏を披露。この日のジャズライブは3回実施されたが、いずれも大盛況だった。また、大人にも子どもにも人気だったのが「ルーレットコーナー」で、参加者は東の間のカジノ気分を満喫。操舵室見学にも多くの乗客が参加した。似顔絵コーナーも常に人で賑わっていた。

そんな船内イベントのなかで、ひととき興味を惹かれたのが「竹細工教室」だ。日常生活のなかで、別府の伝統工芸である竹細工に触れる機会はまず訪れない。基本的な形は最初に組まれており、先生が丁寧に指導してくれるため、素人でも30分ほどで「四海波花籠(しかいなみはなかご)」を完成させることができる。



船内では別府の伝統工芸も体験できる

盛りだくさんの船内イベントを楽しんでいると、いつの間にか瀬戸大橋に近づいていた。本船が瀬戸大橋を通過すると、まるで計ったかのように日が暮れ始め、辺りは幻想的な風景に包まれた。

【クライマックスは姉妹船とのランデブー】

12時間の船旅のクライマックスを飾るのは、明石海峡大橋の通過と、その後の姉妹船とのランデブーだ。外部デッキに集まった乗客たちは、ペンライトを片手にその瞬間を待ち構える。神戸から出港した“さんふらわあ ぱーる”や他社のフェリー2隻とすれ違ったのち、いよいよライトアップされた“さんふらわあ あいぼり”が目の前に姿を現した。両船の船長が入念に打ち合わせして実現したであろう接近ランデブー。両船による汽笛の応酬は、乗客に大きな感動を与えた。その一瞬のスペクタクルは、最後を飾るに相応しい、素晴らしい光景だった。

現在、瀬戸内海を航行する長距離フェリー航路は、夜出港して早朝に到着するダイヤが一般的。そのメリットは、目が覚めるころには目的地に着いているということだ。そのため、船旅を楽しむというよりは、移動および宿泊手段として利用する人の方が多い。しかし、この昼の



操舵室見学会も大好評



夕暮れ時に瀬戸大橋を通過

瀬戸内航路に関しては、乗船していた人のほとんどが『昼の瀬戸内航路』に乗ること自体を目的としており、観光ルートのひとつと位置づけていた。また、寄港地である関西・九州だけでなく、首都圏からの参加者が多いのも昼の瀬戸内航路の人気を裏付けている。

決して天候に恵まれたとはいえない今回の船

旅だったが、船内は常に乗客の笑顔で溢れていた。また、取材で乗船したにも関わらず、いつのまにか記者もひとりの旅行者として人々と触れ合い、船旅を楽しんでいた。あっという間の12時間。昼の瀬戸内航路に乗船したことで、船旅の原点を想起するとともに、新たな魅力も発見することができた。(石川謙吾)